

摂食嚥下障害を主訴に親子入所した児に対して多職種連携で取り組んだ症例

○山本晋也
北九州市立総合療育センター

【緒言】

当センターの親子入所では、育児・発達支援を目的に親子で4週間入所し、各専門スタッフが児を多面的に評価したうえで、目標・課題に向けて集中的にリハビリテーションを行っている。専門スタッフは、医師、歯科医師、看護師、理学療法士、作業療法士、心理士、言語聴覚士、保育士、医療社会福祉士である。今回の発表では、摂食嚥下障害を主訴に親子入所した児に対して、多職種と連携して支援を行った症例について報告する。なお、発表にあたり保護者の同意を得ている。

【症例】

患児：2歳7か月 女児
疾患名：14p-症候群、口唇口蓋裂術後
主訴：食事がすすまない
入所前の状況：ベビーラックに座って、ペースト食を食べている。鼻から液体や固形物の逆流がある。食事中は体を左右前後に動かし、食事に1時間かかる。

【経過】

入所1週目に各専門スタッフが、食事場面、運動機能、発達面で評価を行った。また嚥下造影検査(VF)を実施し、ペースト食で誤嚥がないことを確認した。歯科でも摂食嚥下に関して口腔機能評価を行い、それぞれの評価結果をもとに専門スタッフ間で協議し、方針を決定した。食事中はトライチェアを使用し、食形態をマッシュ食に変更した。その結果、食事中の姿勢が安定し、食事量も増加した。また鼻からの逆流もほぼ消失した。食事場面以外にも入所期間中に運動機能や行動面でも発達が認められた。

【考察】

摂食嚥下リハビリテーションでは多職種連携が必要不可欠である。今回の親子入所では保護者と課題を共有し、集中的なリハビリテーションによって一定の成果を得ることができた。今後も児の成長発達に合わせて、多職種と連携して支援していく予定である。

認定こども園で行ってきた口腔機能発達支援のための取り組みの紹介

○東 優里、重田浩樹、米澤彩美、井形紀子
(しげたこども歯科)

【背景】

嘔まない・飲みこめないという問題は1970年代後半から保育の現場で取り上げられているにもかかわらず、いまだそれらに対するアプローチはほとんどされていない。そこで今回、認定こども園に通園している児に対して口腔機能の発達を支援するための取り組みを行ってきたので紹介する。

【取り組み導入までの経緯】

平成26年3月に当歯科が園医を務める認定こども園と平成26年度の歯科保健について協議を行ったところ、口腔機能発達のための支援を日常の保育を通して行うこととなった。平成26年6月に園職員に研修会を行い、0～3歳未満の児には『ペロタッチ』を、3～5歳児にはブクブクうがいや身近にあるおもちゃ、お口を使った遊びを保育の場に積極的に取り入れてもらうように指導した。

【園での取り組み】

年齢ごとに提示された支援方法を保育に取り入れ、さらに、家庭でも実践してもらうようにパンフレットを作成し、配布した。

【園職員に対するアンケート調査】

アンケートの結果、園での保育に取り入れた取り組みに対して肯定的な回答が多数を占めたものの、家庭でのお口を使った遊びに関してはあまり実践されていない様子であった。

【今後について】

口腔機能は乳幼児期からの学習によって段階的に獲得するものである。よって、今回の取り組みが口腔機能の発達のためのより良い支援になっている事を期待して、今後も取り組んでいく予定である。